

新しい薬学教育へ—若手教員の取り組みと現状

安原智久,^{*,a} 大井浩明,^b 加藤美紀,^c 諸根美恵子,^d 曾根知道^eOn the Way to New Pharmacy Education —Action of Young Educators
and Reactions from StudentsTomohisa YASUHARA,^{*,a} Hiroaki OHI,^b Miki KATO,^c
Mieko MORONE,^d and Tomomichi SONE^e^aFaculty of Pharmacy, Kinki University, 3-4-1 Kowakae, Higashiosaka, Osaka 577-8502, Japan,^bSchool of Pharmacy, Showa University, 1-5-8 Hatanodai, Shinagawa-ku, Tokyo 142-8555,Japan, ^cFaculty of Pharmacy, Meijo University, 150 Yagotoyama, Tenpaku-ku, Nagoya468-8503, Japan, ^dTohoku Pharmaceutical University, 4-4-1 Komatsushima, Aoba-ku,Sendai, Miyagi 981-8558, Japan, and ^eFaculty of Pharmaceutical Sciences, Setsunan

University, 45-1 Nagaotoge-cho, Hirakata, Osaka 573-0101, Japan

薬学教育6年制がスタートして、既に5年生が実務実習に出ている。この実務実習を意識した臨床を見据えた新しい教育は活発となり、多くの議論がなされている。臨床現場と連携した教育、研究活動も活発になってきており、日本薬学会第130年会でも多くの発表がなされ、活発な議論が交わされた。しかしながら、変化を求められているのは直接に臨床に係わる教育だけではなく、基礎教育、つまり大学が大学で行う薬学教育も新たな展開を求められている。この状況の中、学生のニーズに応える、そして、学生が変われる教育をしたいと熱望し、意欲を持って工夫と変化を取り入れている教員は多くいる。しかし、どの教員も、果たして、それが正しいのか、効果があるのかと自問自答しながら、悩みながら試行錯誤を繰り返しているのが現状である。

現在の薬学部における教育で新たな試みが行われている分野が初年次教育である。どの大学でも経験をしていることだが、少子化の影響により、入学生の学力の低下が著しい。従来の初年次教育をそのまま行っても、薬学を学ぶ基礎となる、化学、生物、

物理化学を多くの学生が身に付けることは困難なのが現状である。われわれはこの状況に対応し、すべての入学生が支障なく薬学を学べる基礎学力を身に付けられる新たな学習方略を求めている。

もう1つの試みが、問題解決型教育である。知識を覚えることのみを促すのではなく、身に付けた知識を使えることを目的として、問題を解決するトレーニングを学生に課していく学習方略が活発である。この方略をうまく用いることで学生は基礎科学的な知識から臨床的な知識まで幅広く、かつ横断的に用いる経験をし、様々な問題を解決していく方法を体験的に身に付けていく。

この誌上シンポジウムは、日本薬学会第130年会で企画されたシンポジウム「新しい薬学教育へ—若手教員の取り組みと現状」で御講演頂いた先生方に講演内容に基づいて誌上シンポジウムとしてまとめ頂いたものである。年会のシンポジウムでは、各大学で行われている、独創的で創意工夫に富んだ教育法の実践とその成果を発表し、学部教育に関する議論を行い、各大学における学部基礎教育の質的向上と、若手教員のモチベーションのさらなる向上を目指した。その結果、多くの先生方にご来聴頂き活発なご議論を頂いた。また、ともに教育に携わる薬剤師の先生方の、今の大学での教育を知りたい、今の学生が何を学んでいるかを知りたいという声に微力ながら応えることができたと考えている。

さて、本稿以下3編の総説にて、大井先生には専

^a近畿大学薬学部 (〒577-8502 大阪府東大阪市小若江3-4-1), ^b昭和大学薬学部 (〒142-8555 東京都品川区旗の台1-5-8), ^c名城大学薬学部 (〒468-8503 名古屋市天白区八事山150), ^d東北薬科大学 (〒981-8558 宮城県仙台市青葉区小松島4-4-1), ^e摂南大学薬学部 (〒573-0101 大阪府枚方市長尾峠町45-1)

*e-mail: yasuhara@phar.kindai.ac.jp

日本薬学会第130年会シンポジウムS25序文

門教育への移行期にある学生に対する基礎科目のグループ演習と教員のきめ細かいフォローによる学習効果向上の成果を、加藤先生には、4年次における多分野連携型の問題解決型学習の試みとその成果を、そして小生による初年次での分野横断的統合型薬学教育の試みと学生の基礎科目の重要性認識向上について詳しく述べる。なお、シンポジストの諸根先生の講演内容は既に共同研究者の先生によって、シンポジウム以外の内容も含めた形で薬学雑誌に発

表¹⁾されているのでご紹介させて頂く。本誌上シンポジウムが、薬学教育のさらなる発展と、現在の大学での教育を現場の先生方にご理解頂く一助となれば幸いである。

REFERENCE

- 1) Sato A., Morone M., Azuma Y., *Yakugaku Zasshi*, **130**, 1041–1052 (2010).